

浜松文芸館「内山牛松が物語る河童の絵」展示のご案内

ご好評をいただきましたコラボ展「浜松の幅広い文芸人たち」は5月13日で終了となりました。期間中、多くの方々にご覧いただき誠にありがとうございました。

さて、展示物の入れ替えに少し期間をいただきまして、5月26日(土)から、「～芥川龍之介の『河童』に魅せられて～内山牛松が物語る河童の絵」と題して、新しい企画展を開催します。

芥川龍之介の『河童』を読んで、その作品にある一文に惹かれ、以来、河童を通していろいろな職業や性格の人を描き続けた人物、内山牛松。

今回の企画展は、生涯を通して彼が描いた多くの絵の中から、小説の一場面を河童の絵で表現したり、俳句の情景画に河童を登場させたりしている作品を集めて展示します。

彼独特のユニークな文学の表現方法をお楽しみください。

【内山牛松】(1913年～1999年)

三ヶ日町に生まれる。法政大学哲学科を卒業。高校時代から油絵を描くようになる。大学卒業後は家業を継ぐため三ヶ日町へ戻り、そのかわりで画家福沢一郎に師事。終戦直後、芥川龍之介の『河童』に影響を受けて河童の絵を描きはじめる。

高校教師、その後遠州信用金庫の理事長を務めるが、その間もひたすら河童の絵を描き続け、71歳の時には、大福寺本堂のふすま絵を手掛ける。

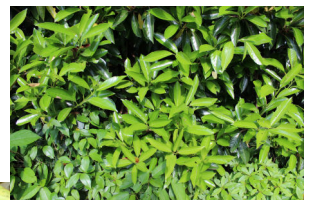


文芸館の四季

落葉は秋から冬の風物だとばかり思っていた私は、5月に入って、文芸館の駐車場を多量の枯葉が舞っていることに驚きました。恥ずかしながら、常緑樹が葉を落とすのがこの時期だと初めて知りました。「常盤木落葉」「夏落葉」などという俳句の季語としての言葉もあるとのこと。

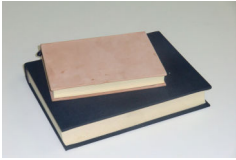
『合本俳句歳時記』によると、「常緑樹の落葉の総称。初夏に新葉が生い始めると、去年の古葉が目立たずに落ちる。」とありました。

今年の新葉を見届けた後、枝を離れるのか・・・、などと妙に納得して改めて地面に落ちた葉っぱを見ているうちに、その茶褐色の一枚一枚が、次代に命を受け継げ得たことに満足し、誇らしげに若葉を見上げているように思えてきました。



お知らせ

- 浜松文芸館を管理・運営しております浜松市文化振興財団が本年4月1日から「公益財団法人」の認定を受けましたのでお知らせします。
- 浜松文芸館では、省エネルギーの推進に対応するため、5月1日より職員の勤務時における服装の軽装化を実施しております。ご了承ください。



浜松文学紀行 8

「花屋」旅館での牧水と雪腸 若山牧水「旅日記」

大正7年5月8日6時25分東京駅発の汽車で、若山牧水は関西旅行に出発した。1週間ほど比叡山の山寺に籠り、奈良、和歌山、伊勢、その他に遊び、6月10日に帰京した。「旅日記」はこの時の記録である。

富士川も、大井川も、好かった。重々しく輝いてゐる青葉の山の間から極めて静かに流れ出してきてゐる姿が有難いものの様にも見られた。天竜川もさうであつた。そしてそれを渡ると直ぐ浜松である。三時、同駅下車、其処には法月紫星君たちが出迎へてみてくれた。

その夜、同市花屋で歌会が催された。同地^{シカイ}斯界の長老加藤雪腸君を初め法月君其他二十人程、果てたのは、一時過ぎであつた。浜松には六年前にも一度来たことがあり、其時にも同じ会が開かれた。そして其時逢つた数人のうち大塚唯我、伊藤紅緑天の両君がいつの間にか他界の人となつてゐた事を知り、少なからず驚いた

と記している。翌朝妻の喜志子に送った葉書には「浜松では二十人ほどの人、宿に押し寄せ歌会となる。果てたのは正に一時半、へとへとになつてしまつた、今朝は予定の如く十時発、京都に向はんとす、京都はまつたく楽しみだ。」と書いている。

この時牧水33歳、雪腸44歳だった。雪腸は2年前、11年間勤めた浜松中学（現・浜松北高）の職を辞して田町にあった明石合名会社の大阪出張所長をしていた。5年前に紅緑天や紫星などと「曠野会」を主宰、専ら短歌に精進していたころである。

牧水の第13歌集「くろ土」には、「五月八日夜遠江浜松市なる歌会席上にて詠める、題「初夏」及び「松」。」の詞書のもと、4首が載っている。

歌詠おとつどへるおほみ部屋二間抜けば寒けき葉ざくらの風
あけはなつ窓に茂れる葉ざくらのそよぐともせで夜風さむけし
曇りがちの夏のはじめのこよひまた曇りてさむき葉ざくらの色
睡たさをこらへてよめる歌なればわが歌の松はひよろひよろの松

雪腸は、静岡師範学校の学生だった明治24年から交通事故死した昭和7年まで、定型、自由俳句、短歌、俳論、歌論など多くの作品を発表してきたが、戦災によりそのほとんどを焼失してしまった。昭和56年刊行の遺稿集「三絃琴」には、残念ながら大正7年の作品は一つも残されていない。

6年前の大正2年5月14日父の葬式を済ませた牧水は、四国・関西方面に遊んで浜松で下車、高町74番地に住んでいた浜松中学教諭雪腸主催の歌会に出て、

浜つづき夏のおほぞらはるかにて立つ白浪のけぶりたるかな(遠江弁天島)

の歌を残している。伝馬町と駅前にあつた花屋は、大米屋と並ぶ浜松屈指の老舗旅館である。